



### 第25号

(年2回発行)

**発行所**  
**喜多流大島能楽堂**  
 〒720-0814  
 広島県福山市光南町2-2-2  
 TEL 084-923-2633

P2	四海波静かなれ	佐々木宗生
P6	小鼓方になって	久田陽春子
P8	能の魅力に嵌まって	及部和良
P10	出会いに感謝して	中川明子

## 能で一番大切な物

喜多流職分 大島輝久

もし「能で一番大切な物は？」と問われたら私は迷わず「能面」と答えます。

遠方で公演がある時に装束は宅急便で送る事もありますが、能面は必ず面袍といわれる頑丈な袍に入れて肌身離さず持ち歩きます。それは能楽師が能面に対して単なる道具を超えた特別な想いを抱いているからに他なりません。時に能面は無表情の例えにされる事がありますが、これは大いなる誤りで良い能面というのは微妙な角度の変化によって実に多様な表情を見せます。

我が家に亡き祖父が「これがうちの家宝だ。」と言って大切にしていた万端(まんび)という能面があります。若い女性の役に使う能面ですが、愛らしい中に妖気とも言えるような凄みを湛えており、いつ見てもその表情の振幅に驚かされます。また能の果てしない可能性をそこに見る気がして胸の高鳴る想いがします。

能面を付けると演者の視界は極端に狭められます。目を閉じて片足で立つ事が困難なように、視界が人のバランス感覚に与える影響は甚大です。

能面を付けた状態で普段通りに動けるようになるには相当の稽古と経験を積まなければなりません。一見特殊に見える擦り足や構えも能面を付けた状態を想定する事によって、その技術を大きく進歩させてきたものと思われまます。

私は中学生の時に初めて能面を付けました。面を顔に当てた途端、あまりの暗さにまるで押し入れに閉じ込められたかのような閉塞感を受け、思わず「取り外してしまいたい！」という衝動に駆られた事を今でもよく覚えています。その暗さの為でしょうか、実際に能を舞っていると舞台の中心にいるにも係わらず、まるで自分だけが別の空間にいるのではないか？という不思議な感覚を得る事があります。舞い進めるうち身体は疲労してくるのに逆に精神は落ち着いてきて自分自身を冷静に視られているような瞬間があり、そんな時はなんとも言えぬ充実感が体を包みます。

能面は外見上ではシテを様々な役に変化させ、実はその内面にまで大きな影響を与える、そんな特別な道具なのです。





# 四海波静かなれ

喜多流職分

佐々木 宗生



ささきむねお  
佐々木 宗生 氏

能楽師 喜多流職分

国総合指定重要無形文化財。日本能楽会々員。

1939年(昭14) 佐々木実高長男として岩手県平泉中尊寺円乘院に生れる。

1946年(昭21) 盛岡にて十四世宗家六平太師の「隅田川」子方で初舞台。

1958年(昭33) 盛岡一高を卒業、上京して国学院大学入学、宗家入門。

1969年(昭44) 青年喜多会で「猩々乱」を披き、独立し職分となる。

以後「翁」「道成寺」「望月」「隅田川」等を披く。

2010年(平22) 東京より盛岡市へ転居。

「中尊寺薪能」「仙台青葉能」を主宰。

「喜桜会」会主。



待望の“平泉世界文化遺産登録”が昨年六月末に実現しました。「仏国土(浄土)を表わす建築・庭園及び考古学的遺跡群」——浄土の世界を現世に表現したもので、浄土思想と日本固有の自然崇拜が融合していると評価されました。奥州藤原氏三代の築き上げた文化と初代清衡公の理想。奇しくも三・一一東日本大震災直後の東北に一条の光明が差ししたといえましょう。中尊寺の山田俊和貫首も「被災された方々に浄土の風が吹き、希望の光となれるように努力したい」とのお話。光堂ひかりとも称される金色堂を中心とする中尊寺、浄土庭園で名高い毛越寺などは、夏頃から大勢の人で賑わう様になりました。

金色堂前の右方、鳥居と老杉の参道の奥が白山神社と能舞台。平成十八年の六月、福山から大島家と会員の御一行様がみえて、謡会をなさいました。当日ご挨拶がてら見所に廻りました弟の邦世(同寺円乘院住職)も喜んでおりました。彼の僧は中尊寺の能でシテを勤めます。私と多門が指導するのですが。

喜多流の古格を備えて野趣にも富む(津田左右吉博士の表現)茅かや葺ぶき入母屋造の野外舞台。嘉永二年に社殿と共に前の舞台が焼失し、同六年(一八五三)に再建されたものです。十三代仙台藩主・伊達慶邦の時の造立寄進ですが、幕末の故か未完成と伝えられます。鏡の松も、昭和二十二年に松野奏風画伯が彩管を振るわれたもの。「道成寺」の鐘かねの鉤かぎ具、笛柱の引鑿ひきざは、昭和五十七年に私が披ひキの時に取り付けました。

この舞台には伝説的な評価が知られています。昭和九年に訪れたドイツ人建築家ブルーノ・タウト氏は金色堂を拝観して、形こそ小さいがまさに珠玉ともいうべきものだ、建築のダイヤモンドとして



第24回 中尊寺新能 能「殺生石」女メシテ 佐々木宗生 (2000.8.14 中尊寺白山神社能舞台)

尊重に値する、と述べ「能舞台はいかにも洗練された構造で、実に簡素極りなき建物だ——この田舎風の典雅な建物は、中尊寺で最も強い印象を与えるものである、これもまた独創的な日本だ」と。亀井勝一郎氏は——「野外に在るので明るく開放的だ。堅牢で豪壮なすがたも実がいいが、位置がまたすばらしい。この位置と方角を選んだ人は詩人にちがいない。私が能楽師なら一生に一度ここで舞うことを望むだろう」——と述懐されている。

また建築考古学者で平泉名譽町民であられた藤島亥治郎先生は、昭和五十一年に屋根の総葺き替えが済んだ後、「もう少し薄くないとね」と不満げでいらした。私もそう思いましたから、心に残っております。地元で葺ける人が居なくなりましたので業者に頼み、三陸の方の葺き、補修の差し芽をしても三十年と保ちません。もう替え時を過ぎていますが国指定重文といえども目前でやるより仕方ありません。実は震災でも建物に破損やゆがみがあつたのですが、余震が更に恐いと宮司さんがとり敢えずの補強をやつてのけたのには、さすがと感心致しました。

大島久見先生もこの舞台での夢をお持ちだったと知り、有難く、また残念です。昭和三十年代、久見先生が毎月上京され、目黒の旧舞台で翁先生(十四世)の慈愛に満ちたお稽古を受けられたとき、地謡の端に坐らせて頂きましたから、先生の熱心さ、克明なその記録ぶり、そして稽古後の笑顔が忘れられません。

「夏の風物詩」といわれる毎年八月十四日の中尊寺薪能も三十五回となりました。昨年は恒例の行事すべて中止か自粛の方針が打ち出されて、薪能も止むなく延期致しました。本年は「養老」多門「二人袴」万作「誓願寺」宗生。昨年は「采女」小波之伝を考えていました。白山神の本地仏が観音菩薩ですから、鎮魂になると考えたのは私だけでした——。

野外舞台ですから、十回に二度の割で雨は降ります。昔からそれを覚悟で皆が観に来て下さったのですが、そういう気持が失われているのか、一部の人が強い抗議をしてきます。やむなく見所に屋根を張ってみたのですが、そのぶん景色が悪くなり、案の定、識者からは不評です。

平泉では春秋に「藤原まつり」が恒例となり、五月四・五日が中尊寺では御神事能、毛越寺では延年の舞があります。神事能は各役を一山の一七ヶ院がそれぞれ専役を伝習して勤め、古実式三番ともに法歴の一つに定められています。私の実家は「関山(中尊寺山号)大夫」家としてシテ方であります。江戸時代宝歴九年(一七五一)から維新までの神事能記録では毎年少なくとも五番の能が組まれました。

現在では脇能は「竹生島」が定番です。明治九年に明治天皇の東北巡行の折、天覧に供してよりの習わしです。昭和二十六年に前宗家喜多実先生と土岐善麿氏に中尊寺が依頼して出来た新作能「秀衡」は毎年の如くだされて、なによりも親しまれております。

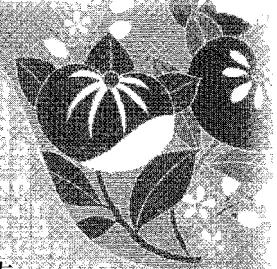
さて、大島令夫人からの原稿依頼をお受けしたものの、ペン先は大震災への思いばかりに走り、何度も内容を変えてとりとめもなくりました。中尊寺のこと能の歴史については弟の邦世が専門ですから、また寺へお訪ね下さい。七大夫、十大夫、秀忠、政宗などが話に登場するはずですが、またドナルド・キーンさんのことや来春の中尊寺本坊御本尊造立供養のことなど——

大島輝久君、友枝真也君、息多門三人の「燦ノ会」が発会し、来る四月二十一日が初公演です。塩津哲生先生の大恩に報いられるよう精進を望んでおります。



第10回 中尊寺新能 能「羽衣」舞込シテ 佐々木宗生 (1986.8.14 中尊寺白山神社能舞台)

# 小鼓方になって



大倉流小鼓方

久田陽春子



舞囃子「西王母」シテ 寺澤杏海 小鼓 久田陽春子



ひさだやすこ  
久田陽春子氏

能楽師 大倉流小鼓方

公益社団法人 能楽協会 正会員

1973年生まれ

大倉流16世宗家 大倉源次郎および父 大倉流小鼓方 久田舜一郎に師事。

能「鞍馬天狗」子方、花見にて初舞台。

1985年 大阪能楽養成会、卒業ののち能「乱」「石橋」を抜く。

2005年 能「道成寺」にて大阪舞台芸術新人賞を受賞。

2010年 自主公演「幸祐・陽春子 能の会」にて能「安宅」を抜く。

全国でも数少ない公式の舞台に出演する女性能楽師として各地で活動。

また、能楽の普及および伝統芸能である能楽を守り後世に伝えていくための活動にも力を注いでいる。

夫 寺澤幸祐は観世流シテ方

叔父 久田勘鳴は観世流シテ方

長男(拓海)長女(杏海)も子方として各地の能舞台に出演中



私が小鼓を初めて手にしたのは、中学一年生でした。それより以前は祖父や叔父が観世流のシテ方という事もありまして、子方でたくさん舞台に出して頂きました。ただ、子方の時の初舞台は記憶にないのが残念です。四歳ごろに鞍馬天狗の花見に出して頂いているのが多分最初の様です。「隅田川」では暗い塚の中で退屈で、後見て塚の後ろにいた祖父に何度も「まだ？」と聞いた事、「昭君」では出番前に鏡の間に置いてあった天冠を見て「綺麗な冠、誰がつけるんだろう。羨ましい」と思っていたら、舞台を終えて幕に入ってきた私に後見の方が「あつ、子方に天冠つけ忘れてた」とショックな第一声を。〇〇の恨みは……ではありませんが大人になった今でも忘れません。六年生の時に妹と相舞した「鶴亀」ではシテが祖父のはずでしたが病気で手術した後でしたので客席から見えてくれ、その数ヶ月後に亡くなった事……など様々思い出がよみがえります。

祖父の名古屋の家には舞台もありましたので、小さい頃は遊びに行くとお弟子さんがお稽古に來られて祖母とお茶やお菓子をお出しするのがおままごとのようでした。

皆さんがよく遊んで下さりお稽古場の雰囲気にも慣れていたはずが、不思議と父がお稽古したりしている風景はあまり見ていなかったのかお能には関係してはつきりと小鼓方だと

いう認識がなかったように思います。普段の子方のお稽古は祖父や叔父がしてくれていたからでしょうか。当時、熱田神宮の中にもありました能楽殿は祖父の拠点でもありましたのでよくお邪魔して待ち時間には自在に神宮の境内にある池の周りを走り回っていた思い出深い舞台です。祖父が亡くなり一周忌の追善会の時に小鼓で初舞台をする事になりました。その後に、養成会に入れていただいたり今の大倉のご宗家のお稽古にもたまに伺うようになりました。養成会では選択した科目に月二回お稽古に行く事になっていて学校が終わってから大阪まで一時間かけて太鼓のお稽古に伺いました。大抵、一番最後で当時八十歳を越しておられた三島太郎先生がじつとお待ちくださりその間にお好きなスキーの本を読んでおられていて、ご高齢なのにスキーをされる事に驚きました。先生は九十九歳までお元気でした。

お謡は近くにお稽古場があった山本勝一先生にお稽古して頂きました。山本先生はお囃子もお好きで、お謡のお稽古だけでなく養成会の発表会が近づくとお稽古日に鼓も持つてくるようにおっしゃって先生が謡って下さり小鼓を打たせてもらいました。

右も左も分からない中学生の私を様々な先生が助けて下さり親切に導いて下さったおかげでのんびり続けてこさせていただけました。ほと

んどが男性のこの世界に、同じ大倉流の大鼓方でした山田利子さんの存在は大きく楽屋の事や様々な事を教えて下さり、時には映画やお食事に連れて行って下さったり年は親子以上に違いましたが身近に思える心強い存在で、結婚や出産など他には相談できないことなど、小鼓方の女性としては四十年ぶりとなる「道成寺」の事など色々背中を押しても下さり女性の先輩の心強い存在だったと感謝しています。その山田さんと私にある日衝撃の出会いがありました。それが大島衣恵さんでした。多分芸大を卒業されて間もないころだったと思いますが、二人とも「若いのに謡もすっかり謡われ、……」という第一印象でした。なので、山田さんから「あなたもつと頑張りなさい」と衣恵さんの話が出るといわれていたものです。

衣恵さんにお会いしたころは私はもう結婚しており(夫は観世流シテ方)、それからしばらくして産まれた子供も二歳から子方に出させて頂き早、この春から中学生になります。その節目に先日「烏帽子折」という牛若丸が義経へと元服する曲をさせて頂きました。

何時までも若いつもりでしたが段々と、着々と次の世代へ移り変わっていく実感を感じる今日この頃です。お能を知らない世代が増えるこれから、小鼓を通して今自分が出来る精一杯の事をしていきたいと思えます。

# 能の魅力に嵌まって

及部 和良

私が日本の伝統芸能である能を観てみようと思ったのは、あの妖艶で魅力的な女面にひそかに憧れを抱いていたからである。その淡い恋心は、いつ頃から芽生えたかは定かではないが、多分長いサラリーマン生活を終える六十歳を過ぎた頃であったと思う。

それまでに定年後の趣味として油絵を習い始めていたが、お決まりの風景や花ばかりを描いていた。ある日、能の公演ポスターの女面が目にとまった。さっそく貰い受けカンバスに向った。しかし、悪戦苦闘思うような画は描けなかった。

平成十六年(二〇〇四年)一月十六日、東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で、私は生まれて初めて能を観た。能面を描くなら、本物の能を観なければだめだと思ったからである。だが、初めて観た能に失望した。能は「小鍛冶」で、主役は八十歳の橋岡久馬という役者であった。ぜんぜん面白いとは思わなかった。

平成二十四年(二〇一二年)一月末で、私の観能数は一七八番となった。最初の年こそ二五一番であったが、爾来毎年二〇〇番以上の能を観てきた。八年間

およ べ かず よし  
及部 和良 氏

1939年 豊橋市に生まれる

1958年 日本勧業銀行(旧 第一勧業銀行・現 みずほ銀行) 入行

1988年~1993年 大船・本所 各支店長、本店検査部 主任検査役

1994年 日本土地建物㈱入社 常務取締役、常勤監査役

2006年 退社

2006年8月 第一回個展「能面の魅力 及部和良 油彩画展」を、東京・日本橋ギャラリー「白百合」にて開催

2008年4月 第二回個展「能面と仏像の油彩画展」を豊橋東高等学校卒業50周年記念行事として、故郷豊橋で開催

Blog <http://nourakutosha.blog105.fc2.com/>

能楽兎者(のうらくとしや)「能 観たまんま」



でこの数字が積み上がったわけだが、最初に観た「小鍛冶」だけで能は面白くないと、結論付けてはいけないと思ったからだ。五番十番と観ていくうちに、次第に能の奥深さと魅力に嵌まっていったのである。

私はこまめな男ではないが、備忘録として観能の感想文を書いている。最初の「小鍛冶」に始まって、現在まで一度たりとも欠かしたことはない。

平成十九年(二〇〇七年)五月十七日、ある人の勧めもあつてブログ「能観たまんま」を開設し感想文を公表した。独りよがりで身勝手な感想に、ずいぶんご批判もいたしたが、概して好評なので気をよくしている。

油絵の方は、平成十八年(二〇〇六年)に東京・日本橋の画廊で最初の個展「能面の魅力」を開催し、二十年(二〇〇八年)には故郷・豊橋の画廊で二回目の個展「能面と仏像」を開催することが出来た。能面打の方とのグループ展には、今も能面を出品している。

昭和十四年(一九三九年)生まれの私は現在七十二歳であるが、能も狂言も心底好きで能楽堂へ行くのが生活の一部になっている。住まいが東京のため、都内の能楽堂へ通うのが常ではあるが、大阪・京都・名古屋の能楽堂にも出掛ける。福山の太夫能楽堂には二度お邪魔した。

観能は流儀を問わず万遍なく観る。人間国宝級の名手やベテランの舞台もよいが、どちらかと言えば伸び盛りの中堅・若手の舞台が好きである。シテ方だけでなく、ワキ方・狂言方・囃子方の三役の演者にも注目している。

観能十年目の目標を掲げている。平成二十五年(二〇一三年)に、能二〇〇〇番、狂言一〇〇〇番の達成である。あと、能二一八番、狂言七十三番で目標到達となる。精々健康に留意して、能楽堂通いを続けるつもりである。



# 出会いに感謝して

中川明子



瀬の浦 新春能楽祭 沼名前神社奉納 (2012.1.3)  
前列右から四番目、筆者

それは春と秋。子供心に待ち遠しくてたまらなかつた季節の行事。父の肩車から歓声をあげて眺めた華やかな古典絵巻の世界。裱姿の行列から伝承の想いが伝わってきた厳肅な雰囲気。豪華絢爛な舞台でからくり人形が舞う姿、独特な囃子と節廻し……。この時の風景と音色、幼少期を過ごした飛騨高山での日々が、後に私を謡曲のお稽古へと導く原点になっています。そして、私自身が幼少期に伝承文化から強烈な印象を受けたことを振り返るたび、大島家が永年にわたって尽力してきた、学校や地域における能楽教育が、将来必ず実を結ぶことを確信するのです。

私が謡曲のお稽古を始めたのは、今から十四年前の学生時代のことです。能楽の調べをテレビやラジオでふと耳にするたびに、(どこかで聴いた懐かしく心地良い響き)という思いがしてならなかつた私にとって、広島市文化財団主催の「能楽ワークショップ」全十五回の講座に参加できたことは、(どこかで聴いた響き)が謡曲そのものであったことをようやく知るきっかけになりました。

受講初日、「実は今日が私の七十歳の誕生日です。」とにこやかに自己紹介をされたのは私の最初の師、今は亡き光成健男先生でした。先

生のお人柄と謡曲に魅了されたメンバーの希望により、ワークシヨップ修了後も「巴の会」と称して引き続きご指導いただいたこと、先生とご一緒した日々は、私にとって至福の時でした。お稽古中、先生はよく大島家の人々のお話を聞かせて下さいました。時には写真を交えながら、そして創刊されたばかりの「能おおしま草紙」を手に取りながら、熱のこもった口調で話されるそのお姿からは、並々ならぬ大島家への想いが伝わってきたことが強く印象に残っています。

私が仕事の都合で広島を離れ、お稽古を中断していた時期も、先生は「再び一緒にお稽古できる日がくるように」と温かく声をかけ続けて下さり、書簡の往復が続きました。懇切丁寧な指導、「大竹の如く」という芸風を重んじ、素直な気持ちで声にすること、真摯な気持ちで型に向かい合うことを一心に伝えてくださった光成先生のご恩は忘れることができません。

仕事で赴任した福岡では、狩野秀鵬先生にお世話になりました。ようやくお稽古を再開することができた喜びに加え、謡曲のみならず仕舞のご指導もいただき、私にとって毎週のお稽古日が一番の楽しみでした。また、世代をこえた流友の皆様との出会いをはじめ、先生のお誘いにより九州各地へ能楽鑑賞に出かける機会に恵まれたことにより、福岡での生活が一層充実し

たものになったことに心から感謝しています。能楽、謡曲の「行かずして名所を知る」魅力と、芸風である「内に籠る強さと柔らかさ」を、狩野先生の教えとお姿によって実感できた三年間でした。

大島家に受け継がれてきた「伝承の心」が、教えを受けた両師から私へとつながり、戻るべくして私は広島の地に戻ってきたような気がしてなりません。二〇〇九年、私はついに大島門下を迎えていただきました。

焼失した能舞台を再建され、「これからの時代、若い者はどうするでしょうね。」と大島久見先生が遺された言葉の意味を考える時、広島の地で教育現場に携わること縁をいただいた私自身にも、能楽をはじめ日本の伝統芸能を継承していく役割が課せられていることを感じずにはいられません。

幸い広島県は複数の能舞台を有し、能楽の題材に多く採られた『平家物語』ゆかりの地でもあります。このような環境だからこそ、生徒が学校教育の場で謡曲の詞章に慣れ親しんでいく機会が多く設けられるべきであると思えますし、謡曲のお稽古、能楽鑑賞の体験が『平家物語』をはじめ、生涯にわたって古典学習を楽しむ姿勢につながっていくことが期待されます。今後とも、大島家には学校での能楽教育を継続して

いただき、素直な気持ちを声にすることの喜び、良い姿勢を保ってこそ人の心に届く声を発することができると喜びを、生徒に味わわせてほしいと願っています。実際に能楽を見聞きする体験と並行して、特に国語科では「言葉の成り立ち」の理解を深める授業の展開が可能かと考えています。例えば能楽を語源とする言葉があること、かつて謡曲が武士達の会話の一助になっていたということから、コミニケーション論にまで話題を広げることができるとしよう。

また、能楽鑑賞は各個人の想像力によっていかようにも解釈が可能なることを生かし、生徒同士はもちろんのこと、教師も共に想像したこと、感じたことを意見交換することも大変興味深い授業展開になるうかと思えます。さらには学校内外で謡曲のお稽古の成果を発表する場を多く設けることによって、生徒の達成感や「伝統的言語文化への興味関心」が一層深められるのではないかと考えています。

まだまだ模索中ではありますが、私自身が能楽、謡曲、良き師、流友の皆様との出会いから受けたご恩を、今後ぜひ教育現場でお返ししていきたいと心から願っています。

広島大島会会員

（中学校・高等学校国語教諭）

# 2012年 演能ご案内

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月15日(日)	第228回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「楊貴妃」 大島衣恵 能「藤戸」 松井彬
4月21日(土)	燦の会	13:00	東京喜多能楽堂	指定席・自由席あり	能「二人静」 大島輝久
4月28日(土)	こころみの会	14:00	梅若能楽学院会館	指定席・自由席あり	能「蝉丸」 大島衣恵
5月5日(祝)	お能で遊ぼう	10:30	リーデソローズ(練習室大)	無料	要申込み(幼児~小学生)
5月20日(日)	喜多流春の会	10:30	大島能楽堂	無料	能 舞囃子 仕舞 素謡
6月17日(日)	第229回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「百万」 大島政允 能「葵上」 大島衣恵
6月24日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	6,000円	能「熊坂」 大島輝久
7月28日(土)	福山八幡宮新能	18:30	福山八幡宮	4,000円	能「鞍馬天狗」 大島輝久
8月5日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光信寺	3,000円 お弁当付 4,000円	能「殺生石」白頭 大島輝久
9月16日(日)	第230回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「土車」 金子匡一 能「羽衣」 大島輝久
9月23日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	6,000円	能「融」 大島政允
10月21日(日)	福山総合文化祭 秋の会	10:00	大島能楽堂	無料	仕舞 素謡
11月3日(祝)	後楽能	10:30	岡山後楽園能舞台	未定	能「黒塚」 大島衣恵
11月6日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表 能舞「田村」
11月18日(日)	第231回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「遊行柳」 大島政允



府中学びフェスタ(2011.10.30)  
府中市立旭小学校六年生

## 喜多流大島能楽堂

〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2  
TEL 084-923-2633  
FAX 084-923-8730  
<http://www.noh-oshima.com>

府中市立旭小学校六年担任 越智俊雄

◆「東遊びの数々に」演目「羽衣」のこの一節をこの五ヶ月間、何度耳にしてきたことでしょうか。初めは自信なさそうな子ども達の謡いの声。「なかなかいい声になってきたな。」と感じたのは、八月の練習の時でした。子ども達の中にも「自信」「慣れ」と同時に、日本伝統文化の「継承」という意識が芽生えてきた時ではなかったのかと思いました。「能を上手に演じることが目的ではなく、能を通して、作法、心づかいなど、日本が古来より大切にできたことを今一度確認し、身につけさせたい。」これが私達担任の願いでした。〜後略〜

◆能の歴史についてや「羽衣」の舞やうたいについてや能楽堂のうしろに描かれている松についてなど様々なことが分かりました。能の授業で習ったことも日頃の生活の中でも学校生活の中でも役に立つことがあると思うので、それを発見して生活に取り入れていきたいと思えます。この度は、私達のためにわざわざ能を教えに来てくださったって本当にありがとうございます。日頃も能のように集中して頑張ってください。

福山市立一ツ橋中学校一年生

◆日本で「能」の練習を教えてもらって本当にありがとうございます。最初、正座ができなくて苦しかった。何回も練習していい姿になって、日本の文化を習った私にとって人生を誇らしいと思えました。今後の留学生活はもっと頑張ります。先生、あきらめないで、まじめに教えてくれて本当にありがとうございます。

広島国際ビジネスカレッジ国際文化コミュニケーション学科 高鵬

おたより・感想ありがとうございます